

平成 21 年度 神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会 (平塚市会場) の報告

県内各市町村の社会教育委員が一堂に集い、地域の事例発表や情報交換を通して、社会教育の抱える今日的課題の解決をめざすとともに、社会教育の充実とお互いの資質の向上を図ることを目的として開催した。

テーマ 「地域力を活かした生涯学習の取組み」～地域・学校・公民館の連携～

- 1 主催 神奈川県社会教育委員連絡協議会、平塚市社会教育委員会
平塚市教育委員会
- 2 日時 平成 21 年 11 月 27 日 (金) 13:15～16:15
- 3 会場 平塚市中央公民館 大ホール
- 4 内容 平塚市社会教育委員の活動について
人権講話 テーマ「極地に生きる子供たちー地球温暖化の最前線を歩く」
事例発表 「みんなが学芸員 かなひ (金目) の取組み」
アトラクション 和太鼓の演奏
- 5 参加者 神奈川県内社会教育委員 158 人、平塚市内社会教育関係者 148 人
合計 306 人

地区研究会の開催に当たっては、平塚市社会教育委員会に地区研究会実行委員会を組織し準備を進めた。社会教育委員の認知度を高め、理解を深めてほしいという思いから、平塚市内の社会教育関係団体にも参加を呼び掛けた。



《平塚市社会教育委員の活動について》

平塚市社会教育委員会議長 高橋通泰

平塚市社会教育委員の活動について、平成 18・19 年度に提言した「これからの公民館のあり方について」を中心に説明をした。

平塚市はおおよそ各小学校の学区に公民館があり、中央公民館が 1 館と地区公民館が 25 館、合わせて 26 館がある。人口の割には公民館の数が多い。また、体育館などを併設した

複合型の公民館もある。

提言は、全部で26項目あるが、当日はそのうちのいくつかを紹介した。

「公民館の機能の強化」については、「地域の隠れた人材の発掘と活用の促進」として、地域の隠れた人材やボランティアの積極的発掘や登録の促進を提言した。

「公民館事業の活性化」として、「共通4事業の見直し」では、「家庭教育学級」と「パソコン教室」は、ある程度役割を果たしたと思われるので、時代の要請に応じた「新入生の保護者教室」や「団塊の世代教室」に代えていく。

「ブロック事業」については、「地域デビュー応援講座」や「子育てを楽しむための講演会」、その他の事業の拡大を提言した。

「館長・主事・運営委員のあり方」については、館長の一層のリーダーシップの発揮、「主事の庁内公募制の導入」、「運営委員の選出方法の改善」について提言した。

情報の提供については、「公民館だより」という紙ベースのお知らせの各戸配付だけでなく、インターネットを利用した情報の提供について提言した。

「サークル活動」については、サークル活動で学んだことを地域へ還元できるような環境づくりの促進、サークル活動の地域住民への積極的な紹介を提言した。

「有料化、民間への管理委託」については、地域づくり、コミュニティーづくり、人づくりの重要な拠点としての公民館は、全ての市民が自由に使える開かれた場所であるべきで、そのためには無料化を継続すべきである。また、公民館は行政が運営すべきで、民間への委託管理は時期尚早であると提言した。



《人権講話 テーマ「地球を歩く 南北両極、ヒマラヤ、現地から」》

朝日新聞編集委員 武田剛

「犬ゾリで白クマを獲るのが夢」だと語るグリーンランドの子どもの夢が、地球温暖化の影響で叶わないのではないかと心配するエスキモーの様子、またヒマラヤにある村の上部に出来た氷河湖が年々大きくなり、いずれ決壊したとき、村全体が押し流されてしまうのではないかと心配する人々の様子などが紹介された。

そのような地域に住んでいる人々は、貧しく質素な生活をしているので二酸化炭素はあまり出さない。先進国の豊かな暮らしが、二酸化炭素を排出し、地球温暖化の原因を誘発し、遠くのヒマラヤやグリーンランドに住む人々の暮らしに影響を与えている。

また、イラクやアフガニスタンなどの戦地では、地雷で足を失った子どもたちや戦争孤児がたくさんいる。

そのような現地を訪ね歩いて、世界中で起こっていることは、他人ごとではなく、全て自分たちの地球上で起こっていることである。少しずつでも環境に優しい生活を送ることによって、地球のどこかで救われる人がいる。子どもたちには、地球儀を見せて「地球は丸い」ということを実感させてほしいと訴えられた。



《事例発表「みんなが学芸員 かなひ（金目）の取組み」》

「みんなが学芸員 かなひ（金目）の取組み」というテーマで、パネルディスカッションが行われた。

コーディネーターは、平塚市社会教育委員の鈴木豊氏、パネリストは、平塚市社会教育委員の米村康信氏、エコミュージアム金目まるごと博物館副委員長の柳川勝正氏、金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会副会長の柳川久子氏と平塚市立金目公民館長の渋谷精一氏の4名にお願いした。

まず、金目地区の紹介が米村氏からなされた。金目地区は平塚市の北西に位置し、中央に金目川が流れ、歴史・文化遺産と自然とが溶け合った素晴らしい景観が作られた地区であり、また、畑や水田が広がった穀倉地帯でもある。

702年に創建されたと伝えられている金目観音堂は、国指定重要文化財に指定されている。また、金目川の堤は春には満開の桜が美しく、平塚八景の一つになっている。

金目親水公園は、平成4年に「農村公園」として造園され、平成12年には、平塚の「ホタルの里」として完成した。現在、ホタル保存会会員によって産卵、孵化された幼虫が2月に放流され、5月の連休には成虫となって飛び回る。その期間は、毎夜、保存会の会員によるホタル観賞会が開かれている。

金目地区の各種団体は、協力体制が素晴らしく、ネットワークが充分機能している。

次にエコミュージアム金目まるごと博物館について、柳川勝正氏から説明がなされた。

エコミュージアムとは、1960年代にフランスで起こった言葉であり、エコロジーとミュージアムの造語である。日本では、平成元年に山形県の朝日村で初めて起こった。平塚では3年前に金目地区でエコミュージアム活動を始めた。

目的は、金目地区を一つの大きな博物館と例えて、その中にある自然や歴史、また人々

の生活まで、まるごとひっくり返して、研究し、継承し、未来に向けて進んでいこうという、まちづくりを目指した野外博物館である。

役目、機能としては3つあり、地域の自然や文化遺産を守り育てる保護センター、地域の発展に貢献する実践者を育てる学校、そして、地域の進む道を探る研究所である。

3年前に約50名でスタートし、現在は84名の会員がいる。部会は、歴史・文化部会、自然・景観部会、産業部会、情報・イベント部会の4つある。4部会からそれぞれ4名ずつ役員が出て、その方々が中心となって会が運営されている。

エコミュージアム金目まるごと博物館を一言で言えば、「地域の人々の地域探し」である。活動をする上で大切なことは、金目の地域と住民が常に中心になって行う、行政と連携を密にする、沢山の組織とのネットワークを十分に働かせる、ハード面ではなくソフト面から行う、ということである。

このような活動を進めていく過程の中で、金目地区を考える人が段々増えていく。そうすれば、新しいコミュニティが生まれて新しいまちづくりができる。金目まるごと博物館とは、金目に住んでいる人がお客様であり、金目に住んでいる人が全員学芸員である。そういうスタンスで地域の人々の地域探しを進めていって、心を支え合う秩序あるコミュニティが金目に生まれるだろうと信じている。

具体的な活動としては、部会事業、全体事業がある。部会事業は、史跡めぐりや自然景観めぐりを中心に実施しており、大勢の方が参加している。全体事業としては、春の桜まつりや秋の収穫祭等が行われている。その他には、学習発表会や秋山博墓前祭が行われている。学習発表会は、昔、金目観音堂などで行われていたディベート大会を歴史発見として引き継いでいこうと始められた。

秋山博墓前祭は、遺徳を偲び功績を称えるため、毎年開催している。秋山博は、自分が目が悪いのに、目が悪い人が自立できるように活動した人である。そのおかげで盲学校ができた。盲学校ができたのが明治43年で、来年は100周年である。

この2つの事業は、エコミュージアム金目まるごと博物館の重要な活動として今後も継続していきたい。

続いて、平塚市地域教育力ネットワーク協議会の説明がコーディネーターの鈴木氏からなされた。

平塚市では、中学校区ごとに青少年に関わる各種団体が集まり「地域教育力ネットワーク協議会」が組織されている。これは、「地域社会の中で、子どもたちが生活体験、自然体験などを通し、様々な世代間との交流を積み重ね、小・中学生が「生きる力」を育むことができるように、中学校区を単位として教育環境づくりを推進する」という目的である。

各地域教育力ネットワーク協議会の活動は、平塚市からの委託事業という位置づけとな



っている。

子どもたちの安心・安全のため、地域が一体となって取り組む事業として、全地区で実施をしている事業は3つある。それは、「子どもサポート看板」の設置・管理、夜間や夏休み期間中などのパトロール、そして、平塚市地域教育力ネットワーク協議会が行う全体研修会への参加である。

また、各地区の地域特性を活かした「生きる力」を育む事業については、「かるた大会」、「灯ろう流し」、「通学合宿」、「防災キャンプ」、「ナイトハイク」などがある。

続いて、金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会の説明が柳川久子氏からなされた。

金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会は、地域の各種団体からネットの担当者として出ている方々とどこの団体でもないネット専属の方々とで組織されている。ネット専属の方々は永年金目の地域活動をされてきた方々で、そういう方々がいるからこそいろいろな活動が継続され、また新しい事業が出来ている。

教育力ネットの主な事業は、こどもひろばで行う、「サツマイモ植え」、「サツマイモ掘り」、「ひまわりまつり」、「コスモスまつり」や「灯ろう流し」、「通学合宿」などがある。

通学合宿は、今年はインフルエンザの影響で開催できなかったが、今まで6回実施してきた。平塚市内では、金目地区のみが実施している行事である。

この行事は多くのボランティアがサポートしていて、1日目は118人。2日目も基本的には同じくらいの人数が動いている。どの時間帯も大人のサポートが必要であり、大人がなくて済む時間帯はない。一週間後に開催するお別れパーティーでは、参加した子どもたちに感想を話してもらおうが、最初は口ごもって話ができなかった子どもも堂々と話ができるようになる。子どもたちには、「家と違うので言葉で話さなければ人に分かってもらえない。言葉のコミュニケーションを大切にして参加するように」と言っており、その成果が表れる。子どもたちの成長した姿が見られるので、やってよかったと実感できる。

続いて、金目公民館の活動について、渋谷氏から説明がなされた。

金目公民館は、平成2年3月に体育館を併設した平塚市内でも比較的規模の大きな公民館として建設され、今年で19年目を迎えている。

平成20年度の利用団体は213団体あり、年間利用者数は約62,000人。生涯学習の場として活発な活動が展開され、その学習の成果を地域活動に活かすとともに、活動を通じた地域住民相互のふれあい、交流の場となっている。

公民館の事業は、大きく分けて3つの事業からなっている。

まず、共通事業としては、高齢者学級、家庭教育学級、児童生徒地域参加事業、団塊の世代教室の4事業である。

自主事業としては、お話の会「絵本の読み聞かせを月1回、年間で12回」の開催、男の料理教室、着物の着付け教室、お飾り作り教室などを行っている。

関連事業は、地域の各種団体の皆さんと協力して実施する事業で、通学合宿、公民館祭りなどがある。

公民館の運営方法は、13人の運営委員によって決定される。金目公民館では、自治会や青少年健全育成団体など各種団体の代表者8名と、社会教育活動経験者5名で構成されているが、社会教育活動経験者の5名が、継続して公民館運営に当たっていることで、金目地区の伝統ある事業の継続性の確保、円滑な事業の推進がなされ、多大な成果を収めている。

特色ある事業として、「スイート・ハート・スクール」（家庭教育学級）と、「こどもひろば」の2点がある。

「スイート・ハート・スクール」（家庭教育学級）では、普通救命講習、子どもの発達心理に合わせた子育てのポイントなどについての講習会が開催された。

次に「こどもひろば」は、金目公民館の北側に隣接し、約900坪の広さがあり、以前は休耕地であったが、この広場で、地区内にある金目小学校とみずほ小学校の子どもたちが、学年を超えて自由に遊び、様々な体験をしながら地域の人と交流できる場として借りている。現在は、教育力ネットワークと協力しひまわりやコスモスなど四季折々のお花の開花に合わせて、屋外でのお話の会や科学実験を交えたお祭りが開催されている。その他、小学生によるサツマイモの栽培、ほうき草の栽培など、大変有意義な体験型の活動を展開しており、公民館としても全面協力で活動を支援している。

かなひ塾では、地域の良さをもっと子どもたちに伝えるためには、お母さん方が金目のことをもっと知る必要があると考え実施した。

また、今年度は、新規事業として、来年4月に小学校に入学するお子さんを持つ保護者を対象とした「親学び学級」、そして、生まれたての赤ちゃんを持つお母さん方を対象とした「ベビーマッサージ」を開催する。

新規事業を実施し、新しい世代の公民館利用を促し、公民館事業の活性化を図っていきたい。

このように金目地域の各種団体が協力し合って様々な事業が展開できるのは、地域の結束力が強いということ、また、それを牽引するリーダーが存在することが大きな要因ではないかと思う。またそれによって、子どもたちに社会性や協調性が培われ、「生きる力」がはぐくまれていると感じられる。

《アトラクション 和太鼓の演奏》

神奈川県立平塚ろう学校和太鼓同好会
「鼓舞子」による和太鼓の演奏が行われた。

聴覚障害を持った方々が、全身で太鼓の響きを感じ取り、仲間の身振りと瞬間の目線で、音を合わせ、素晴らしい演奏を披露された。

